

なぎなた指導者は  
努力と精進によって  
正しい技の継承を

（すなかわ・みどり）  
砂川 碧

〔福岡県なぎなた連盟〕



大正13年大阪府生まれ。昭和14年大阪府立豊中高等女学校入学と同時に薙刀を習う。19年大日本武徳会薙刀術教員養成所修了。

大阪府立大手前高女、福岡教育大学など多くの学校でなぎなたを指導。全日本なぎなた連盟理事、実技委員長、審議員などを歴任。現在、全日本なぎなた連盟参与、審査員、福岡県なぎなた連盟副会長、福岡県学生なぎなた連盟会長。なぎなた範士。平成17年度武道功労章受章。

●はじめに

平成十七年に、(財)全日本なぎなた連盟は創立五十周年の記念すべき年を迎えました。振り返ってみれば、私の人生で最も充実した時期は、なぎなたとともに歩んだ、この六十五年間の道程でありました。苦勞の多かつた時代でしたが、そのたびに、なぎなたによって培われた不屈の精神で乗り越えられたものと、感慨も深く、感謝いたしている次第です。これまで、どのような状況にあっても、常に、なぎなたの普及、組織の発展に努力してまいったつもりですが、これからも皆様とともに精進しながら、なぎなたの道を継承していきたいという思いから、拙い私のなぎなた人生と、なぎなたに対する情熱を記してみたいと思います。

●生い立ち

私は大正十三年、大阪府に生まれ、箕面市みのおで少女時代を送りました。両親はともに小学校教員で、教育に携わる日常であったので、物心ついた頃は、主に祖母に甘やかされて育ちました。幼少の頃は体が弱く、家族に心配をかけたそうです。高等女学校に進学し、初めて薙刀と出合いました。そ

の後は、風邪一つ引かない健康体になっていきました。

教職にあった母は、昭和十二年頃、すでに小学校で薙刀を指導していたようです。当時、母は教え子をわが子よりも大切にしているように幼少の私には感じられました。しかし、夜中に目を覚ますと、母が私に着せるセーターをせっせと編んでいる姿がよく見られ、いまだにその姿が忘れられません。

父は、私がつまっている小学校の校長をしていました。昭和初期、修身の授業は校長が行っていたのですが、拳手をして私には決して発表させてくれず、少々不満でした。家に帰ると、厳格な父が、私の学校での行動をどこで見ているのか、お転婆てんぱぶりを叱られるのがたびたびでした。このように、私は大正初期の教育者としての両親に育てられ、幼少期を送りました。

少女期を迎え、昭和十四年、高等女学校に進学することになりました。入学試験科目は歴史だけで、しかも国史のみであり、私の得意な教科でした。幸運にも府立豊中高等女学校の第一期生として入学することができました。

### ●高等女学校時代の正課授業「薙刀」

昭和十四年の入学当時には、正課で薙刀があり、指導は阿部豊子先生が担当しておられました。先生は、京都武徳殿において、天道流十五代宗家美田村千代先生に教えを受けて修業された方でした。



府立豊中高等女学校1年の時、天道流の形稽古をする筆者(右)(昭和14年)

阿部先生との出会いが、私にとって、天道流との初めての出合いとなりました。週一回の薙刀授業が待ち遠しく、先生とお会いできるのが本当に楽しみでした。

授業は全員一斉の共同練習でした。「二文字ノ乱」の「用意」の号令に始まり、乱れの「えいっ」の気合発声に、私の青春が始まりました。もちろん、薙刀のクラブ員としても張り切っておりました。先生のいろいろな教えが私の胸にしっかりと刻まれ、すばらしい指導者に出会えたことが、なぎなたへの情熱が今に続く源になったものと確信しております。

先生のご指導で心に残っていることは、私の技ができないときも叱ることなく、先生の大きな澄んだその眼で「困ったなあ」というように、技ができるまで気長に見守ってくださいましたことです。今でも、そのことが印象深く思い出されます。このように、阿部先生のご指導は、「して見せて、やらせてみせ

て、褒めてやる」すばらしい指導法でした。

その後、在学中に太平洋戦争が勃発し、女学生も「戦争に勝つまでは」の合言葉の下、果敢に決起、協力したものでした。

### ●武徳会薙刀術教員養成所に入所

昭和十八年、戦争が激しくなる中、五年間の女学校生活を終え、その後の進路を決めることになりました。阿部豊子先生から薙刀術教員養成所を受験することを勧められ、また両親も大いに賛成したので受験することにいたしました。武徳会の立派な建物の一室で面接を受け、大変緊張したことを覚えています。試験には無事合格することができ、入所いたしました。これも高等女学校の教育と、薙刀の正課授業で学び得た体の備えがあったからだと信じています。薙刀術教員養成所は一年間の短い期間ではありませんでしたが、本当に一日一日が充実したすばらしい修業期間でした。

当初の済美寮の生活は、早朝の朝礼から始まり、午前午後の武道科のお稽古、午後は文科の授業と詰まっております。夜の茶道の時間には、昼間の稽古の疲れから、つい居眠りすることがありました。その後、自習時間があってから終礼となり、一日が終わるといふ充実した日常でした。

当時の武道科は、主任が吉村セキ先生、西垣きん先生が副主任として指導を担当されていました。薙刀術教員養成所の毎日は厳格な修業の連続でしたが、私の印象に残るのは、まず、武徳殿の重厚



大日本武徳会薙刀術教員養成所で  
修業中の頃(昭和18年)

な建物でした。道場内に玉座があり、道場への出入りの礼から始まって、道場内の三礼の教えまで、いろいろなことを学びました。

お稽古は、広い道場の水拭き掃除から始まりましたが、京都の冬はとても寒さが厳しく、雑巾が凍り付いたことがたびたびありました。そんな厳しい寒さの中、稽古でできたあかぎれやしもやけの足を引きずりながら、懸命に稽古をした日々でした。指導は、そのほとんどが天道流の形稽古、立ち合い稽古で、修了近くになって剣道との異種試合稽古を行いました。異種試合稽古は初めての経験でしたが、必死になって立ち向かっていきました。

当時の指導は現在のように手取り足取りの指導ではなく、形稽古を一度教われれば、見取り稽古も含めて、繰り返し繰り返し自分自身で稽古をして会得し、上達していかなければならなかったのです。「形より始まり、形に終わる」という、その教えそのもの内容でした。また、西垣先生の公平無私なご人格は、今でも深く心に残っています。指導者は公平無私に指導をしなければならぬということを西垣先生から教えられました。